



この一冊

Vol. 125



当会会員 中野 元裕 (59期) ●Motohiro NaKano

『趣味の文具箱』という雑誌をご紹介させてください。サブタイトルは「文房具を愛し、人生を楽しむ本。」です。この雑誌には、万年筆を中心に多くの筆記具が取り上げられ、デジタル一色のような時代の中で、自分の手で書くことに拘るアナログ派が関心を持つインクやノートなどの実に様々な文房具の情報が、購買欲をそそられる記事とともに掲載されています。

私が万年筆を本格的に使い始めたのは大学4年生のころ。司法試験の勉強を本格的に始めるようになり、論文式試験の答案を一日に3通も4通も書くようになったころ、スラスラと答案が書けるボールペンが見つからないのが私の悩みでした。もともと筆圧が強い方で、あのころは早く合格したいという気持ちの焦りが手に伝わったのか、書く時に余計な力が加わり、答案作成に時間がかかっていたのです。常に腱鞘炎気味でした。そんな中、高田馬場にある文房具店の店員さんに薦められたのが万年筆でした。人生最初の一本は3,000円のプラチナ社製の鉄ペン。万年筆のペン先（ニブ）は金製が主流です。金の特性から、書く時に

『趣味の文具箱』



樫出版社
1,620円(税込)

ニブが適度にしなり、余計な力を逃してくれます。ただ、金ペンだと安いものでも1万円。アルバイトで予備校代を捻出していた私に手が出せるはずがなく、スチール製のニブを持つ一本を選択したのですが、それでも3,000円。ボールペンなら高いものでもせいぜい数百円ですから、まさに清水の舞台から飛び降りる気持ちでの購入でした。

でも、この万年筆との出会いで、私の受験生ライフは大きく変わりました。答案用紙との相性も良かったのですが、インクフローがよく、滑らかな文字でスラスラと答案が書けるようになりました。合格するまでこの一本のみを使い、論文式試験の答案もこの万年筆で作成しました。

早いもので私の万年筆ライフも20年以上が過ぎました。私は普段の執務の中でも万年筆を多用しています。相談メモや事務員さんへのちょっとした指示メモ、裁判期日のメモも万年筆で作成します。一度、弁論準備の時に私も裁判官も相手方代理人も万年筆を取り出したときがあり、三者で笑みを浮かべたことがあります。執務机の上には、二本用のペンスタンドが置いてあり、いちいちキャップを開け閉めしなくても万年筆が使えるようにしてあります。苦学生だった私も、今や金ペンを買えるまでに成長しました。国産品は思い入れがあるプラチナ、舶来品はモンブランとペリカンを愛用しています。

そんな私を陰ながら応援してくれるのが『趣味の文具箱』。ちょっとマニアックな雑誌ですが、発売日には多くの書店やネットで購入することができます。万年筆というと高価なイメージがあるかもしれませんが、その名のとおり一生使える筆記具です。自分の手で文字を書くことの大切さを実感することもできます。そんな筆記具の魅力がたくさん詰まった雑誌が、私にとっての「この一冊」です。 ■